コレンテ　vol. 38　n. 321　　agosto　2017

# CORRENTE

Centro Culturale Italo-Giapponese

イタリア通信 27

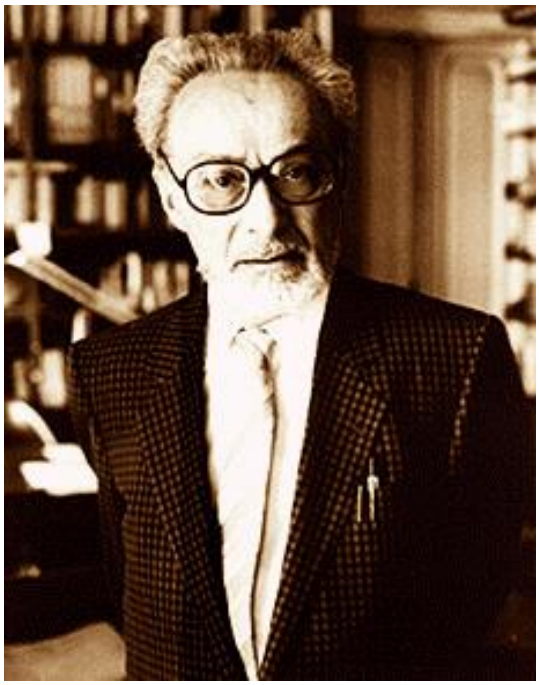
## ＊あるドイツ人についての記憶＊

### ～『周期律』「バナジウム」を読む～

深草 真由子

プリーモ・レーヴィが亡くなって今年で三十年になる。『これが人間なのか(*Se questo è un uomo*)』(邦題『アウシュヴィッツは終わらない』、竹山博英訳、朝日選書)の著者として知られるレーヴィは、化学の技術者でもあった。アウシュヴィッツを生きのびることができたのも、ナチスに協力した巨大トラスト、IG・ファルベンが建設した合成ゴムプラントの研究所に化学の専門家として採用され、最後の二か月、肉体労働をまぬかれたことが要因にある。1975年には『周期律(*Il sistema periodico*)』(竹山博英訳、工作舎)を発表している。これは元素名をタイトルとする二十一の短篇を収めた、化学者レーヴィの自伝的作品である。ここで紹介するのは二十番目の「バナジウム」。手に入りにくい元素バナジウムは硬く展延性のある金属で、青みがかった灰色をしている。

トリーノ近郊の塗料工場の責任者を務めるレーヴィは、製造過程で生じたトラブルをめぐって、原料の仕入れ先であるドイツの一大メーカー(戦後解体されたIG・ファルベンの後継会社)と書面での交渉を始める。塗料というのは、使用前は適度な濃度の液体で、使用後はすぐに固まらなければ売りものにならない。両極の状態のあいだで全体のバランスをとり、タイミングよく一気に変化を起こす物質として、ドイツ側からバナジウムの投入が提案されるのだが、レーヴィにはひとつ心にひっかかることがあった。相手のミュラーという技術者が繰りかえすスペルミスが、二十年ほど前アウシュヴィッツの化学研究所で会った、同姓のドイツ人の発音の癖とそっくりなのだ。二人のミュラーが同一人物であることを突き止めたレーヴィは、『これが人間なのか』のドイツ語版を送り、相手からの返信を待つ。「バナジウム」は、アウシュヴィッツでたがいに立場を異にした二人の文通を描くものである。

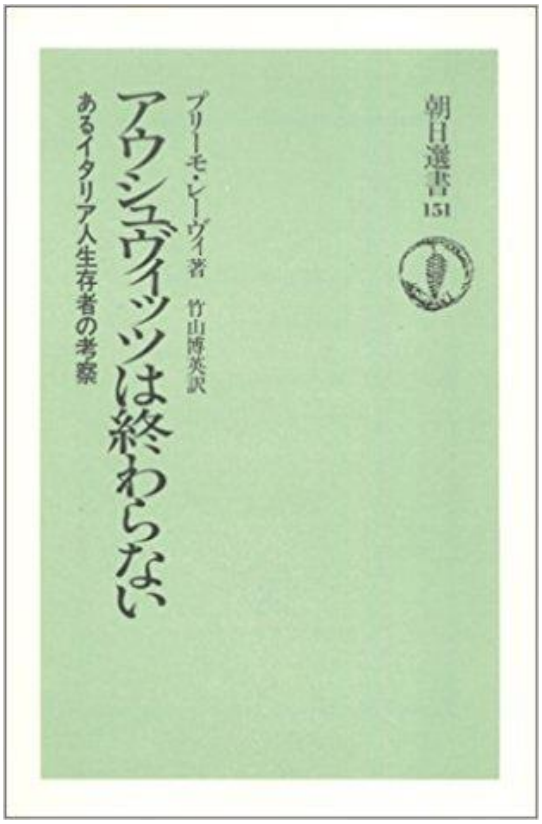


【プリーモ・レーヴィ】

出典：https://it.wikipedia.org/wiki/Primo_Levi

『これが人間なのか』は1961年、西ドイツで出版されていた。のちに『溺れるものと救われるものと』で報告されるように、本に感銘を受け、著者に手紙をしたためたドイツ人読者のなかに、ヘティという女性がいた。ドイツ人理解のために役立つ著作や人物を手紙で紹介することがあった彼女は、1967年にフェルディナント・マイヤーという男をレーヴィに引きあわせている。マイヤーはアウシュヴィッツの化学研究所に出入りしていたエンジニアで、そこでレーヴィにも会っていた。実はこのマイヤーこそが「バナジウム」のミュラーである。

マイヤーはどんな人物だったのだろう。1967年3月、はじめての手紙の中で、マイヤーはレーヴィの生還を喜び、『これが人間なのか』で名があがっていないユダヤ人の行方を問うている。腕に刻みこまれた数字の羅列と引き換えにアイデンティティを奪われていた収容者の名前を、マイヤーは知っていたのだ。レーヴィの返事は次のようなものだった。




【『アウシュヴィッツは終わらない』 表紙】

あなたにこうして手紙を書くことができるのは、私にとって大きな意味があり、喜ばしいことです。よい思い出というものがめったにない環境で、あなたのことはよい思い出として残っているものですから。……あなたが私たちの名前を覚えていてくださったと知って、驚きました。心打たれ、感謝の気持ちでいっぱいになりました。少なくとも誰かにとって、私たちは単なる番号ではなかったのです！……あなたは私がより頻繁にひげを剃れるように一筆したためてくださり、革の靴と清潔なシャツを入手させてくださりました。そして、どうしてそんなに脅えたようすなのかと私におっしゃいましたね。どう返答したかは忘れましたが、私たちの境遇を把握し、同情し、おそらくは罪悪感をも抱いている方だという、確かな印象をもったことを覚えています。(Mengoni, pp.192-7)

また、アウシュヴィッツ時代のマイヤーの日記を読んだレーヴィは、「誠実で思いやりのある人のようだ(Mengoni, pp.98-9)」と感想を記している。マイヤーは文通が始まってまもなく急死した。

それから数年後、当時の書簡を読みかえしたレーヴィの目には、マイヤーが以前とは異なる人物に映った。「ドイツの中産階級の典型」とレーヴィが考えるようになっていたある性格が、マイヤーにもはっきり見てとれたのだ。レーヴィはその特徴をミュラーのなかで浮き彫りにしようとしたという(Mengoni, pp.148-51)。

【アウシュヴィッツ収容所の門】

「バナジウム」のミュラーは、ヒトラー台頭の勢いに流されてナチス学生同盟に加入したものの、後に熱が冷めて退会したという過去をもつ男だった。

戦時中は都市の破壊を目のあたりにして（その時はじめて）戦争に怒りを覚えたという。化学者として配属されたアウシュヴィッツでは、かなり重要なポジションにあったのだろう。レーヴィの記憶では、彼はほかのドイツ人からいつも一番に挨拶されていた。それなりの装いが求められる職場で、ぼろの囚人服を着て作業するレーヴィを憐れむ彼のまなざしの中には、偽善が読みとれた。

そして彼は敬語で「なぜそんなに不安げな面持ちを」と私に訊いた。当時ドイツ語でものを考えていた私は、心のなかでこう結論づけた。<<Der Mann hat keine Ahnung>> こいつ、なにも分かっていないと。（*Il sistema periodico*, p.559）

レーヴィと文通するようになった今も、ミュラーはなにも分かっていなかった。彼にとってアウシュヴィッツは、（ヒトラーでもなくドイツ国民でもなく）人類の所業であった。『これが人間なのか』はどういうわけか、ユダヤ教の克服と「汝の敵を愛せよ」というキリストの教えの完遂を意味し、人類への信頼回復の証左であった。そしてミュラーは、IG・ファルベンが収容者を強制労働させたのは、彼らの命を救うためだったと本気で信じていた。大量虐殺については、当時はなにも知らなかったと主張した。ガス室から立つ煙を目にしていたはずなのに、そこで何が行われているのか、気にもしていなかったのだ。さらに、自分自身にとってもレーヴィにとっても、〈過去の克服〉のために再会することが必要なのだと繰りかえした。

ミュラーはアウシュヴィッツで働いていた民間人であり、親衛隊のように暴力や殺害に直接関与したわけでない。しかし身の危険を冒してまでユダヤ人を助けるような勇敢さや正義感は、彼には微塵もなかった。良心の呵責に苛まれないですむ程度に囚人に親切をほどこし、みずからも一端を担っている悪のシステムそのものからは無責任に目をそむける〈典型的な灰色人間の標本（un esemplare umano tipicamente grigio）〉だったのだ。

真っ黒の物体も、顕微鏡のレンズの下では、灰色分子の集合なのかもしれない。大きな悪も、人びとのあいまいな態度が招く結果なのかもしれない。1976年、教科書版『これが人間なのか』の増補で、「ドイツ人は収容所の存在を知っていたのか」という学生読者の問いかけに、レーヴィは次のように答えている。遺言のように重く響くことばである。

ナチス・ドイツではある特殊な作法が広まっていた。知る者は話さず、知らぬ者は問わず、問われた者は答えなかった。典型的なドイツ市民はこうして無知を勝ちとり、無知を守った。自分がナチズムに同意したことが、それで十分に正当化できるような気がしたのだ。口を閉じ、目を閉じ、耳を閉じることによって、自分のドアの前で起きていることは自分の知るところではない、よって自分は共犯者ではないと、そんな幻想をつくりあげていた。

知ること、知らせることは、ナチズムから距離をとるための（結局はそう危険でもない）ひとつの手段だった。私が思うに、ドイツ国民は全体としてその手段に訴えることがなかったがゆえ、この意図的な怠慢の罪を全面的におっているのだ。（*Se questo è un uomo*, p.162）

【アウシュヴィッツ収容所】

参考文献

P. Levi, *Il sistema periodico*, in Tutti i racconti a cura di M. Belpoliti, Einaudi, 2005, pp. 361–577.

P. Levi, *Se questo è un uomo*, Einaudi, 2005.

M. Mengoni, *Primo Levi e i tedeschi*, Einaudi, 2017

（元当館スタッフ）

『素晴らしき自転車レース 28』

## 一本足の自転車乗り

谷口　和久

「失われたものを数えるな。残されたものを最大限に生かせ」

これはパラリンピックの創始者、イギリスのルートヴィヒ・グットマンの言葉である。

第二次大戦後、時の英国首相ウィンストン・チャーチルの命により、傷痍軍人のためのリハビリ病院の所長となったグットマンは、リハビリ活動の一環として、車いすのスポーツ大会を１９４８年からスタートさせた。

この大会は１９６０年にはオリンピックと同じくローマで開催され、のちにこの大会が第一回のパラリンピックと認定された。ちなみに、パラリンピックという言葉が使われるようになったのは、ローマの次の、１９６４年東京大会からである。

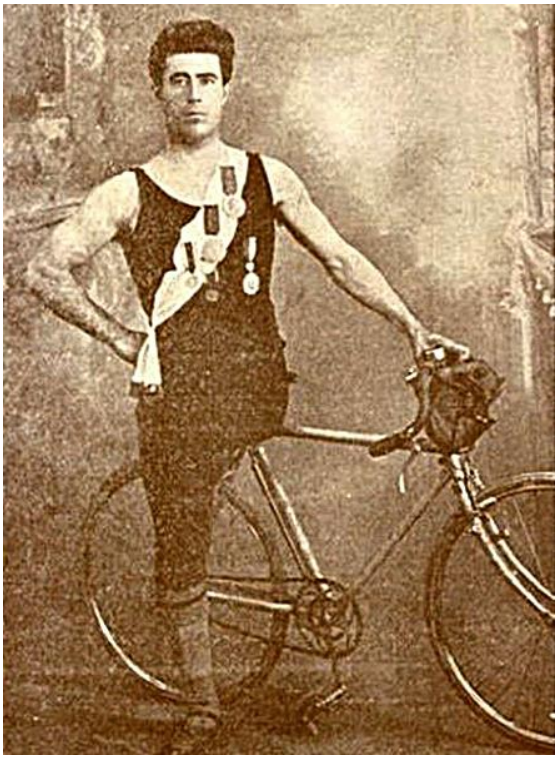
ローマ大会では２３か国、４００人の参加であったものが、２０１２年のロンドン大会では１６４か国、４千人を超える規模へと広がっていった。冒頭のグットマンの思想が広がってきた、その賜物だろう。

第一回パラリンピックからさらにさかのぼること約５０年、２０世紀初頭のイタリアに片足を失いながら活躍した自転車乗りがいた。

１８８２年ローマで生まれたエンリコ・トーティ（Enrico Toti)は、父親が鉄道員だったこともあり、自身も鉄道員の道へと進んだ。

鉄道員として働いていたある日のこと、機関車の注油作業中の事故で、片足をほぼ付け根から切断する災難に見舞われた。

足を失い、さらにこの事故により仕事まで失ったトーティであったが、グットマンの言葉そのままに、失われたものを数えず、残されたものを最大限に生かす人生を歩んだ。



【エンリコ・トーティ】

出典：http://www.lifeintravel.it/enrico-toti-cicloviaggiatore-con-una-gamba-sola.html

事故から２年後には、足を一本失ったハンデをものともせず、自転車にまたがり、ローマを起点にした長距離レースに参戦、不屈の精神を示した。

当時はまだ義足というものがなかったのか、トーティは右足一本でペダルをこいでいた。自転車のトレーニングの一環で片足だけでペダリングをすることもあるが、これはあくまで短時間のトレーニングである。

片足だけで何時間も何日間も自転車に乗るのが並大抵の苦労でないことは、日ごろ自転車に乗っている人ならおわかりになるだろう。推進力は二本足の半分、さらにバランスを取るのにひとかたならぬ労力がついやされる。実際トーティの写真を見ると、器械体操やレスリングの選手かと見まがうようなガッシリとした上半身に目がいく。

レースの後にはヨーロッパ周遊の旅に出た。まずローマからミラノを経由してパリをめざし、ベルギー、オランダを通って、デンマークから

さらにフィンランドまで足をのばした。そこからさらにロシアからポーランドに入ったところで自転車の不具合により帰国せざるをえなくなった。その間、約１年にわたるツーリングであった。自転車の不具合さえなければ、アジア横断まで考えていたというから、なんともすごいヴァイタリティーである。

【自転車をこぐトーティ】

出典：https://www.cdsconlus.it/index.php/2016/12/03/enrico-toti/

旅の途上では、自画像の絵ハガキを売ったり道ばたで似顔絵を描いたりして路銀を稼いでいたというから、多才な人だったのだろう。

帰国の翌年には、こんどは南をめざし、エジプトをへてスーダンへ。しかしながら今回は当局に「これ以上先は危険」と足止めされ、強制送還の憂き目にあった。

そうこうしているうちにヨーロッパでは第一次大戦が勃発。イタリアも１９１５年に参戦した。

トーティという人は、もともと愛国的パッションを多分に持っていたようで、参戦が決まると、あちこちの部隊に志願の手紙を送った。しかし、残念ながらというべきか当然というべきか、片足を失った身ではどこからもなしのつぶてであった。

そこでトーティは自転車でフリウリの最前線に乗り込み、なんとか非正規兵としてもぐりこんだ。しかしながらカラビニエーリに見つかってしまい、ローマに帰されることとなった。

しかし、これくらいのことであきめるようなトーティではなく、翌年には、どのような経緯か不明だが、アオスタ公のとりなしを受け、彼の率いるイタリア陸軍の第三軍団に義勇兵として入隊することとなり、ここでベルサリエーリ(Bersaglieri)という、いわゆる特殊部隊に配属されることとなった。

ベルサリエーリは、辞書などを引くと「狙撃隊員」とあるが、実際の任務は諜報や伝達、側面支援など非常に幅広く、将棋の駒でいうところの香車や桂馬のような存在である。その歴史はイタリア統一期に始まり、帽子やヘルメットに鳥の羽根かざりをつけた粋なスタイルは、現在のイタリア軍にも引き継がれている。

ベルサリエーリの部隊には偵察や情報伝達のための自転車部隊もあり、トーティも当然のごとく、その一員となった。

【折り畳み自転車をかついだベルサリエーリ隊員】

出典：https://it.wikipedia.org/wiki/Bersaglieri

第一次大戦は１９世紀から２０世紀にかけて開発された新技術 —航空機、戦車、潜水艦等々— がはじめて投入された戦争であったが、自転車もそのひとつであった。とはいえ自転車自体には攻撃能力も武器搭載能力もなく、騎馬のように大量に実戦投入できるようなものでもなかったので、どちらかといえば小回りのきく偵察や伝達で重宝された。また、後年の日本軍では「銀輪部隊」と名付けられる部隊も生まれた。

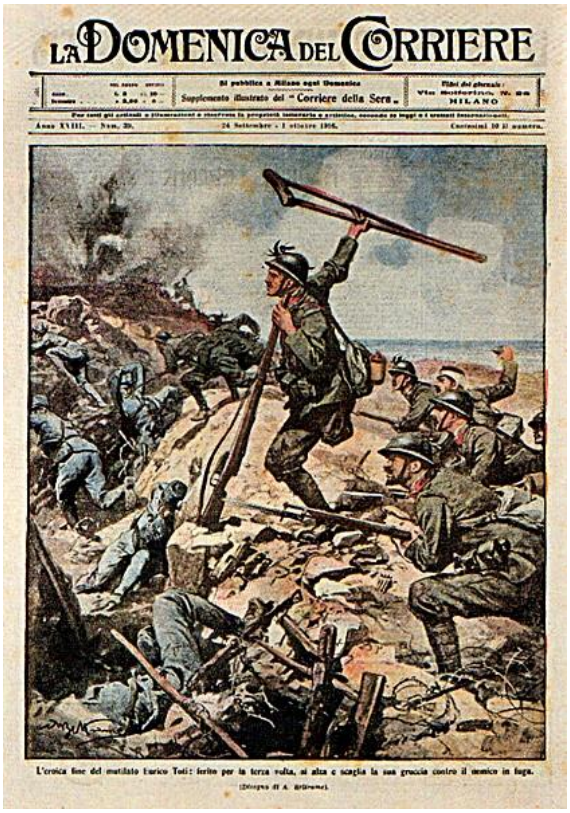
イタリアでは、国を代表する自転車ブランド、

ビアンキがメイン・サプライヤーとなり、ベルサリエーリ部隊に自転車を供給した。その中には山岳地帯でも持ち運びしやすいように、折り畳み式の自転車もあった。

さて、念願かなって徴用されたトーティだが、最前線のゴリツィアでの戦いで命を落とすこととなる。銃弾を何発も受けながらオーストリアの陣地に立ち向かい、最後は自らを支えてきた松葉づえを敵軍に投げつけて事切れた。

トーティの奮迅ぶりは新聞の一面を飾り、彼の最後の勇姿である松葉づえを投げつける姿の銅像が建てられた。また、各地に彼の名を冠した「エンリコ・トーティ通り」が設けられた。

最終的には悲劇的な最期をとげたトーティだが、身にふりかかった障害に屈することなく、夢と情熱とエネルギーを燃やし続けた一生であった。




【新聞の一面を飾ったトーティ】

出典:https://it.wikipedia.org/wiki/Enrico_Toti


［参考資料］

Daniele Marchesini, *L'Italia del Giro d'Italia*, il Mulino, 2009

Istituto dell' Enciclopedia Italiana, *Dizionario Enciclopedico Italiano*, 1970

『イタリア軍入門 1939～1945』(吉川和篤・山野治夫著, イカロス出版,2006)

『パラリンピックを学ぶ』(平田竹男・河合純一・荒井秀樹編, 早稲田大学出版部,2016)

wikipediaj 関連情報


（当館スタッフ）

## ～会館だより～

### イタリア現代小説の今

**～ローマ散歩編～**

会報誌の連載でもおなじみ、京都ドーナッツクラブの二宮大輔さんをお招きし、かつて住まわれていたローマを舞台にした現代小説のお話を頂きます。
トラットリア・ルチアーノで美味しい食事を頂きながら、ローマ散歩はいかがでしょう。

・講師:二宮　大輔(京都ドーナッツクラブ)

・会場:トラットリア・ルチアーノ
(日本イタリア会館京都本校から西に約 50m)

・日時:2017 年 9 月 18 日(月・祝) 13:00-15:30
(13:00-14:00 ビュッフェランチ、14:00-15:30 講演)

・参加費:　受講生・一般:4,000 円
　　個人維持会員:3,000 円


編集・発行 /**(公財) 日本イタリア会館**
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4
TEL:(075)761-4356/FAX:(075)761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: http://italiakaikan.jp/